

和書類

下二

四十六

和書門			
二七〇七四	號	函	架
一一一	號	函	架
一四	冊	架	冊
五六	冊	架	冊

内閣文庫			
二七〇七四	號	冊	架
五十六	冊	架	冊
二〇〇	冊	架	冊

内閣文庫	
番號	和 27074
冊數	56 (46)
函號	200 5



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



秋子我知請集卷第十

雜奇上

歌云

大納言師頼

秋子我知請集卷第十

實治百首奇なまきり時鴻露

山階入道前太右

白州乃病れも衣なきは田義の病よぬれけ

系集集の初より

の中より

伏見院御製

高祖又秀能作らの約ぬよ申付侍り
あふうとて羨慕のしありの世に後者のれ
よ海うとてゆかりつとよか乃柱ようこころ
ゆかり
な原秀作
まろりもいふれ後者のうとて世の
百首あふり一時浦松
前中池と有光
清見と雲とわぬよ早急のねと海のへん也
名取まといふ事と
海正尹那有親

いせの海もわら年も大伴のうら乃海松のうら
瀬をさすといふいふ

皇太子文を更俊成

いせの海もわら年も大伴のうら乃海松のうら
瀬をさすといふいふ
合のつと打か海はれうとつとあり
いせの海もわら年も大伴のうら乃海松のうら
瀬をさすといふいふ
いせの海もわら年も大伴のうら乃海松のうら
瀬をさすといふいふ

いせの海もわら年も大伴のうら乃海松のうら
瀬をさすといふいふ
文保百首あふり一時浦松

多う時おまの心と 氏部はるな

のこも成よの非思代はあはらそまど

歌しらす

前大納言実教

あのみもつとめをきかひつよはつらまどゆきい

貞和百首争めあはし時

入道三友親王の歌

今もさと秋立花の初鹿世よありよ(三)神

子曰はあはらつらむり日神祇伯郎仲

よなしむひつらむら見のりくつら

侍賢(門院)堀川

いさむかひのねのこひしてむまれ

ね

神祇伯郎仲

初らもむまのねは移そいそく

よ陽人乃らそらゆら

鴨那祇

やうはひひても又別より六十の

歌しらす

前大納言実教

いせりくおれうさまそとくむ

あ元百首争めあはらつそ

後守(門院)御家

時一の道に若くはめらきよは代とほくくしんをたふ

寶治二年後醍醐院上旨とすなりけり

時よ草と 花山院前内大臣

冬風のまはみまうりひたり去の光はゆりこひ

凱一守 信下實性

去ぬ乃ちあらはるる清ねんわらももをさあまつま

後醍醐院臣の典約

あはれまの月もひつそそあ乃とよはつるを

前大僧正慈順

閑らうむれれ梅の花乃ふ差ゆとけく自よま

板原宗泰

きり重れ酒ねもあや自ひそくぬさうぬ梅の

あえ百首奇しやせり時柳 下所

兼中池玄雅存

朽ゆらむその柳冥とくさよつらう宿えあり

凱一守 源重之女

まゝぬよあせら宿のひまきけさうむ計の袖をたて

弘安六年三月晦日除月中の月ぬ乃

やうゆらふ前大納言の世のうき昔懐かき

糸織とのうみすもらつてよ

前大納言為氏

いとゆかりの御本このぬよとれぬあしはまきとあは
ぬ

あつちのいとしはまきあはれあつちのいとしはまきあはせ
春日社よふしそなまきり百とそあけ申す

為道御長

ゆかりよあつちのたれまきあはゆかりの月あ
又保百首新なむけりそ記

氏子為ぬ

むらりゆかりのゆかり乃た身あつちのいとしはまき
あつち

題とす

龜山流御製

あつちのゆかりあつちのいとしはまきあはゆかりの月あ

貞和二年百首新なむけりそ記

兼中御言雅考

あつちのゆかりあつちのいとしはまきあはゆかりの月あ

平宗宣御長もあつちのいとしはまきあはゆかりの月あ

そあけ申す

今あつちのいとしはまきあはゆかりの月あ

あつちの月夜と

あつちのいとしはまきあはゆかりの月あ

源一

向河法師

あつらひのまきも昔はふのかし月をたふし一葉海の

花平成國

むねのくに月もあつらひのまきも昔はふのかし月をたふし一葉海の

後光の筆も道長孫の筆

あつらひのまきも昔はふのかし月をたふし一葉海の

後光の筆も道長孫の筆

昔の海潮

あつらひのまきも昔はふのかし月をたふし一葉海の

後鳥羽院御製

あつらひのまきも昔はふのかし月をたふし一葉海の

山家流花とらふし

中文とよみ

あつらひのまきも昔はふのかし月をたふし一葉海の

あつらひのまきも昔はふのかし月をたふし一葉海の

庭の花も昔はふのかし月をたふし一葉海の

后三位あま

あつらひのまきも昔はふのかし月をたふし一葉海の

花十首并よみわけ申す

源仲実御製

朽のうら花よ此花とらふに我々のまよふ花

後守の院掌お興侍

うぶら我後まうらひの花よまよひのうら花

道圓法師

まよふ花よ此花とらふに我々のまよふ花

花のほ花とらふに我々のまよふ花

三茶入の前六段の巻

まよふ花よ此花とらふに我々のまよふ花

前大僧正良信郎とらふに我々のまよふ花

前僧正實福

はよ

まよふ花よ此花とらふに我々のまよふ花

花よ此花とらふに我々のまよふ花

赤深朱門

まよふ花よ此花とらふに我々のまよふ花

二品は親とえ物

まよふ花よ此花とらふに我々のまよふ花

夢の意圓師

まよふ花よ此花とらふに我々のまよふ花

中野大輔まよひの院掌時奈の舞人

まよふ花よ此花とらふに我々のまよふ花

はよ此花とらふに我々のまよふ花

入おの種一骨のまうくきしきうきわと花のま

うきおの種一骨のまうくきしきうきわと花のま

うきおの種一骨のまうくきしきうきわと花のま

うきおの種一骨のまうくきしきうきわと花のま

うきおの種一骨のまうくきしきうきわと花のま

うきおの種一骨のまうくきしきうきわと花のま

うきおの種一骨のまうくきしきうきわと花のま

うきおの種一骨のまうくきしきうきわと花のま

うきおの種一骨のまうくきしきうきわと花のま

うきおの種一骨のまうくきしきうきわと花のま

けりし心と

春後敷有

うきおの種一骨のまうくきしきうきわと花のま

うきおの種一骨のまうくきしきうきわと花のま

うきおの種一骨のまうくきしきうきわと花のま

うきおの種一骨のまうくきしきうきわと花のま

うきおの種一骨のまうくきしきうきわと花のま

うきおの種一骨のまうくきしきうきわと花のま

うきおの種一骨のまうくきしきうきわと花のま

うきおの種一骨のまうくきしきうきわと花のま

うきおの種一骨のまうくきしきうきわと花のま

郭云の... 明... 物...

... 遠... 綱...

... 守... 人...

... 友... 行...

... 法... 眼...

... 前... 大... 納...

... 郭... 云... 山...

... 法... 三... 位...

...

...

郭云の... 山...

新日吉社... 山...

夏真... 山...

... 山...

郭云の... 山...

... 山...

... 山...

子親... 山...

... 山...

... 山...

つらつらと郭をさうとせしめり 勢やあつらふ
とらうとせしめり 大宰府 教道親王

おきつらつらとつらつらと郭をさうとせしめり
八月五日 業武とつらつらと

前大細云ふ定
依りておきつらつらとつらつらとつらつらとつらつらと

源清成物長
おきつらつらとつらつらとつらつらとつらつらと

源清遠
おきつらつらとつらつらとつらつらとつらつらと

おきつらつらとつらつらとつらつらとつらつらと

はせりつらつらとつらつらとつらつらとつらつらと

つらつらとつらつらとつらつらとつらつらと

つらつらとつらつらとつらつらとつらつらと

つらつらとつらつらとつらつらとつらつらと

つらつらとつらつらとつらつらとつらつらと

落 秋の風 秋の風 秋の風

すくすくしものこころをたれぬ存の割の秋のこころ

光の輝き入道前按察家の千首方へ庵宇

萩 後二位家澄

宇の守候の秋もさう守光の秋の萩れし風

秋の風 前大僧正守春

原草の里のじうれ清草原とさうも秋は新しき

由來感恩在秋とさうし事と

ち藤門院地蔵

かいてし秋の夕べさあも地蔵と秋のけりけり

秋の風 中務卿宗子親王

ちよとじうし秋の秋風とさうも秋のけりけり

前原秀長

ちよとじうのこころをさうとさうも秋のけりけり

文保三年百首弁なまきり時

前中納言為相

ちよとじうのこころをさうとさうも秋のけりけり

秋の夕とさうも 前原基任

ちよとじうのこころをさうとさうも秋のけりけり

前中納言定資家跡弁合と秋のけりけり

くろくもあはれおのりあはれは久しと月よ

歌一らすよ 永福の院

よのつらふもあはれおのりあはれは久しと月よ

皇太后まゝ久保城

しゆふふふふふふふふふふふふふふふふふ

前々昔昔おた定

ふふふふふふふふふふふふふふふふふ

可

前々納まら定

ふふふふふふふふふふふふふふふふふ

歌一らすよ 平約氏

たふふふふふふふふふふふふふふふふふ

世のふふふふふふふふふふふふふふふふふ

前々僧正実超

ふふふふ今年の候は昔は月とじりの神も

後云位行志

ゆの跡とふふふふふふふふふふふふふふふふふ

元亨三年八月十日東後宮の院は月と

中々新められし時

前々納まら定

和名乃浦より二の村にあらむとけく六代まへ甲月と

姓のなかの中は 常盤井合乃常太政大臣

ふしとあらむとけくまへとけく六代まへ甲月の

度會綱棟

とあらむとけくまへとけく六代まへ甲月の

前僧正慈勝弁合一乃まへ甲月の

藤原説房

九代まへ甲月の

とあらむとけくまへとけく六代まへ甲月の

信正乃まへ甲月の

信正乃まへ甲月の

江下隆剛

思ひもまへ甲月の

建武二年内裏子前弁の村もまへ甲月の

つらとをまへ甲月の

等持院贈たむ

今もまへ甲月の

西月まへ甲月の

まへ甲月の

山田まへ甲月の

言状をよみてみる

前大納言経继

細い紙に書かれたものか、おぼろげに読める。九月ついでりの月お大僧正道昭の許に
およのころにわかれの夕にた露けき物と
の程はよくしてゆきかきや

前持僧正良宗

言状に秋の夕に露とさか神とありての事

即ちす 元妙法師

立田山町向の雨乃をわきまをりしお葉や津な

前大納言俊光

ゆくも又もさかるとわしの梅とつらみよと

秋とわしむらとよみゆき

小弁

ちあつりお叶すまよし秋や秋よりくるかきら

同九月冬のおと 源光氏

かきらあつり秋の目録とよみて一巻に成ぬ十月の文

秋すらす 右原基時

定めの物とよみてす村向ぬまよく甲録とよ

鴨祐守

らめく家時ぬよちもくくううい力世よちたのいり

澄さん法親王

神とれ又この文もめらりてそちの力いりまよちた

あまよ回ゆつとせねらり日大指の文よま

らせねらりま 朱有院印製

日のひりちりよまのちのちのちのちのちのちのち

印ぬ 太皇太后名文

白雲のたけりぬらりぬらりぬらりぬらりぬらりぬらり

えんまえんまぬらりぬらりぬらりぬらりぬらりぬらり

どのこまぬらりぬらりぬらりぬらりぬらりぬらりぬらり

いそよ時ぬ雲とりのとりのとりのとりのとりのとりの

後宇多院印製

ぬらりぬらりぬらりぬらりぬらりぬらりぬらりぬらり

歌一守 玉印院印製

時ぬ少このののののののののののののののののののの

は中階倒

我神の涙りりや神を月よあよいさぬ時ぬ打のん

後原秀長

横やまらりぬらりぬらりぬらりぬらりぬらりぬらりぬらり

平師親

ゆつろく風流をく神貴あり集葉の時あり

平貞宗

那波早夕親をく風流をく

二正法親王兼光

ゆつろく人かあまのれをく

飛山殿をく山家冬朝をく

後宇治院御製

我まあ人かあまのれをく

いし守

あまのれをく

中長舞

和のうたの下まわりをく

貞和二年百首をく

正二位隆敏

川よをく

正中二年百首をく

後醍醐天皇御製

わが浦やあまのれをく

文殊文物伝をく

名紙をく

娘とよめる事とらひく讀行せり

紀洪氏物語

尋ねおき浦らの浪子を泣わたりたれとるに

子とよめる 前僧正道性

まゝり泣けつてても顔子馬のりてまゝりお海に

入る二京親王の浪

お方けりおたし浦よと秋子を泣けりせんよおたり

新後撰集よ入りて後お兼集よおれ

ゆきれいあり 僧正道順

わの浦よありとこれ浪子を海とおよひ泣つてす。

海りいゆりり時子馬のりくとすていあり

法下公順

ふよもたよよあすわくれて哀うとみれあまら

又保百首よあまらとる

二京法親王是助

こ来りる都波のきれりり世よ何と娘を移とる

歌一冊を 法皇御製

水のよま入のうはすけいれすあまらとる

式子内親王

うらめも風はけり波のよま移のうはすけいれすあまら

甲九流の若くは乃りたぬる秋宮のいこ
しうかう風乃りけしく吹くをれはうあ

増基法師

浦風よつ若衣印しひく力にありつらむ若くは宮

領業法師

ひうあまの若くは乃りたぬる秋宮のいこ

左を中納言成

清なりえんあまの若くは乃りたぬる秋宮のいこ

百首をきえしうりし時宮

前中納言有光

うりあまの若くは乃りたぬる秋宮のいこ

文永三年十一月二日宮のいこ

りあまの若くは乃りたぬる秋宮のいこ

とりあまの若くは乃りたぬる秋宮のいこ

とりあまの若くは乃りたぬる秋宮のいこ

りあまの若くは乃りたぬる秋宮のいこ

ゆりあまの若くは乃りたぬる秋宮のいこ

寄衣類のいこ

は白法師

月あまの若くは乃りたぬる秋宮のいこ

述懐百首弁の中一居寔

皇太后文宣皇后

於此との景福我らおさけはつて下りる

おさけはつて下りる

おさけはつて下りる

宣政門院

年らみかたお物さあり昔と今と心く

津守回助

と文よ年の言いんるおれらつて日おれ

と文よ年の言いんるおれらつて日おれ

とらぬりよ 笑哉之世

だららぬおれらおのこをわけて我れととる年の言

おれらつて下りる なる藤原朝臣

の年の言いんるおれらつて日おれ

おれらつて下りる

後照念院実白太政大臣

けしまたおれらつて下りる

日元年百首弁りしつて下りる

後宇多院御製

おれらつて下りる

新千載和歌集卷第十七

雜方中

建武二年内裏より人へ詔とせりて千三

年九月より十月の月時秋大衆

前大納言為世

長き世よりおきておきておきておきてのなほ月とせり

詔とせりて 前大納言推有

よまきの帝と月のごとくじんさ平にのり神のまこと

通照寺より月とみくしあり

注三位頼政

あきの人のけよのまこと月のごすあり廣はの池

月清歌よりあき 前大納言云明

久々の月のごとくれねとてあくとつらとるの川か

あきとつらとるの川か

あきけいれとみまはららるるかたつらふ月分るくあり

あきの月とつらとるの川か

あきしゆたれハ 前大納言推有

あきの月とつらとるの川か

あき百首并あきとつらとるの川か

あきの月とつらとるの川か

... 雲霓沈吟 前大僧正 通昭

九代のみこの竹ふさけしうらうらと柳もあけ春のけり
述懐の方のまことのみ竹もつらして九代の
物よ流るわら事とあひてよあり

前大僧正 通昭

九代の君よはてしてまゝとよをどうもこれさうて
... 前大僧正 通昭
... 春日村より久しくまゝりせり世首方村中
前大僧正 通昭

絶もようつて一物と我も世よまゝとよとてん雲のぬけ
... 前大僧正 通昭

... 前大僧正 通昭

一条内大臣

... 雲のぬけしうらうらと柳もあけ春のけり
述懐の方のまことのみ竹もつらして九代の

... 前大僧正 通昭

元徳三年四月一日内裏より人々を召さるり

てつらうらうらと柳もあけ春のけり

後光の照院前実白たを

ふもわの神代の賢治もまんとつて年々後には

てんてんてんてん 前中納言宣房

はくすそいじの流のふしせひふうとふううんれ

はくすそいじの流のふしせひふうとふううんれ

流といふはくすそいじの流のふしせひふうとふううんれ

流といふはくすそいじの流のふしせひふうとふううんれ

はくすそいじの流のふしせひふうとふううんれ

はくすそいじの流のふしせひふうとふううんれ

はくすそいじの流のふしせひふうとふううんれ

はくすそいじの流のふしせひふうとふううんれ

おのり心と 権大納言忠

はくすそいじの流のふしせひふうとふううんれ

うみんーらに

はくすそいじの流のふしせひふうとふううんれ

はくすそいじの流のふしせひふうとふううんれ

はくすそいじの流のふしせひふうとふううんれ

はくすそいじの流のふしせひふうとふううんれ

はくすそいじの流のふしせひふうとふううんれ

はくすそいじの流のふしせひふうとふううんれ

せらよ月がうらさおとそけりやとわたりたれらふ

つらうきりきり 疾州法師

ゆえにらや井の月とやまはるおちりの清きまはる

花しらす 前大僧正公院

風より横川の牧乃下陰よふらあをよふふじき

建武二年内裏より首より何

法中云々禪

濁らさ横川の水れきびなけてもまた心と誰よりせん

本懐よりそよまを始りきり

法皇御製

あまのまを渡りたりゆあものらとまたいほくひりか

まげく事ゆたりはうとゆきり

建礼門院右京守

ふらふのあまうらひのあふんはるしじきま

信よ女の力をきんとすん取よりうけけ

道余法師

うとくも我がいふあつて一あんあれうらう

年はなれゆきりまうらひの人乃許へまうら

つらねをとりまをゆきりけうらうきり入

ゆきり弁 前大僧正公院

わけの文ののきりよきやんはつ子の親あふ

亭子院ありおをせはつりきりは讀約なり

三系た長

うりまん世よいそききまはさひやまあふ

貞和二年百首弁めさむ時

正二位隆教

さうふんせいけお世のうまはあつさ世代の松

百首弁ま一時眺

前大納言公蔭

前代の山坂乃松のまはさう夕日まあり漢語

山家

権大納言実俊

ねをさ松の嵐乃あじまも枕よひく松のまふ

おりんさ海之をせはて後人の琴をひかれ

いりませはりり

後京極院

人なれをさあし松風の勢をまくにまあふ

世そのれをせはてりり

宣政の院

とまを川にれわりとれまよ海乃露のかりはふ

歌一守

静仁法親王

秋みくも定のられ竹ありまらあふ昔をり世は

貞和二年百首并一首

入る前太政大臣

ふをひてのしむるは物成なるに取替りて定むるは

述懐弁うくうり

源部長物語

うきあふゆふのれも昔作のよからしむるは

大御門院小宰相

里つふ作のよれあをけしむるは

入る二親王の國家より百首并一首

りり時作を

法中浄弁

ゆふの作のよれあをけしむるは

又保百首一首

矢作のうらぬのたぬは

百首并一首

二親王親王の風

影らふ作のよれあをけしむるは

二親王親王の風

はくふくしむるは

藤原業清物語

たふらの作のよれあをけしむるは

父中長祐親よりなるの帯より秘曲より

くゆて又物別忠より帯の長曲待きり時お

ひつりきりたり 中長祐親

帯竹の二乃るびつてても秘曲よりぬきりたる

秘曲殿より首飾の中より

前大細云お母

若も戦よりんくむせつとくおひりこのなるを

康永四年冬のは等お院贈られたる云

集傳の文のよりとくくものあも秘曲の給

ひつりきりたり 中長祐親

入る親よりん答

秘の風もひつりたるの下よりわきとみり

前大細云お母

あふ人わたりとくく秘の風もひつりたる

百首弁の中は是市述懐とつり

氏よりる返

あふ人わたりとくく秘の風もひつりたる

あえ百首弁よりる市述懐

正二位隆教

あふ人わたりとくく秘の風もひつりたる

源頼朝の事

源和氏

その海にわたる事

古今序の初

僧正兼海

その海にわたる事

源頼朝の事

その海にわたる事

その海にわたる事

源頼朝の事

その海にわたる事

その海にわたる事

源頼朝の事

源和氏

その海にわたる事

源頼朝の事

源頼朝の事

その海にわたる事

その海にわたる事

源頼朝の事

きり時入る内を信さうのむねお持ちの事
あつたつたなるなり 按察使実録

中平の光乃坂をくわらうら親の海よりかきよめられ
あ人保あけり還昇のこゝにたつたつた
てよういふなり 中原師宗朝臣

我々のうらなえをよめられたり又立のちり雲のよ
貞和のうらうの月のおつたわあつた
ゆーつたよーとつた

按察使實録

むらうやうらのたのトまゝのあつたあつた

あつた 前大納言為定

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
つたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
つたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

按察使實録

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

かきつけしり作らるるに
周嗣法師

弘安百首弁よりまら時

海老原信人よりまら時

平宗宣御后

二宗法親王寛延

文保百首弁よりまら時

河原よりまら時
述懐弁よりまら時

中交をまら宗一女

花の母よりまら時
よれ知り

前竹信正良宗

うらまへよりまら時

平氏村

うきえいしん

親之師

ありんたのう

入道宗親王性助家

前大僧正持物

母のうき

性助は宗親王の

法中実性

行末

親之

性大僧正宗親

うき

源直頼

叔父

百首

入道宗親王性守

列

文保百首

後照念院園白左大臣

行

不義而富且貴於我如浮雲と云ふらんを

惟宗光庭

かゝるおれをいふも中絶しよううらやまはるるを

いふと指部より奇なりはゆかりの中は海松と

前右左衛門督為成

浪のすまふと云ふらんをみづのうらみのうらみと

いふと難波のわたりは世よふと云ふ一柳のし

いふと難波のわたりは世よふと云ふ一柳のし
いふと難波のわたりは世よふと云ふ一柳のし

前原澄祐朝臣

あつる難波の若れとのいふおれ入はよふあつる

いふと難波のわたりは世よふと云ふ一柳のし

いふと難波のわたりは世よふと云ふ一柳のし

いふと難波のわたりは世よふと云ふ一柳のし

いふと難波のわたりは世よふと云ふ一柳のし

いふと難波のわたりは世よふと云ふ一柳のし

いふと難波のわたりは世よふと云ふ一柳のし

いふと難波のわたりは世よふと云ふ一柳のし

いふと難波のわたりは世よふと云ふ一柳のし

いふと難波のわたりは世よふと云ふ一柳のし

月かきつるくみりてうらまへはうらまへのまはるはる

紙にらす 前大納言の氏

にひのわたりてうらまへはうらまへのまはるはる

日者十福師社に後てまをりてあの中

前大納言の家

うらまへのまはるはるうらまへのまはるはる

は西園寺入る前大納言の氏に一人

口してはまをりてうらまへのまはるはる

前大納言の氏

うらまへのまはるはるうらまへのまはるはる

うらまへのまはるはるうらまへのまはるはる

師さんと入るもうらまへのまはるはる

まのうらまへのまはるはるうらまへのまはるはる

うらまへのまはるはるうらまへのまはるはる

うらまへのまはるはるうらまへのまはるはる

うらまへのまはるはるうらまへのまはるはる

うらまへのまはるはるうらまへのまはるはる

前中納言の家

うらまへのまはるはるうらまへのまはるはる

中原師重綱長

あまのまゝのいふはなまのまゝとていふ人

述懐の弁は申小

信實お長

はては我乃其のそつはよらんはあめれ

有原信良

水壺の墨はれさのいぬとせし母は強きものいふ

前末儀乃長書とていふまゝ物といひ

かゝく候はけり 菅原長備お長

いふまゝのいふはなまのまゝとていふ人

顔ふか 前中細云云

かゝる者の記とていふまゝ及まぬかゝるはあめ

新後撰集とていふまゝとていふ人

ゆきり 祝部乃長

いふまゝのいふはなまのまゝとていふ人

いふまゝ 持天僧部宗縁

年一わらわらとていふまゝとていふ人

いふまゝ

まのまゝのいふはなまのまゝとていふ人

續後撰集とていふまゝとていふ人

たのしみ

我がまへにむかひのまはれ業をたもつらむわがわがわが
百そとふまへに時 大納言殿宣母

わが浦やうれなまはれはうへてりまはれはうれはうれ
おしらす 江戸浦弁

ふよせんとみ浦まのまはれはうれはうれはうれはうれ
和方おのまへ人まはれはうれはうれはうれはうれ
以候はらまへ 惟宗光吉朝臣

わがわがわがわがわがわがわがわがわがわがわがわが
述懐をうへてうへて

前原雅弘

わが浦まへに汁のたあはれむのたあはれむのたあはれむ
續千載まへに汁のたあはれむのたあはれむのたあはれむ
ゆまはれ浦まへに汁のたあはれむのたあはれむのたあはれむ

ゆまはれ浦

わのうへにむかひのまはれ業をたもつらむわがわがわが
まへにむかひのまはれ業をたもつらむわがわがわが

わが浦まへに汁のたあはれむのたあはれむのたあはれむ
まへに汁のたあはれむのたあはれむのたあはれむ

江戸浦弁

まへに汁のたあはれむのたあはれむのたあはれむ
まへに汁のたあはれむのたあはれむのたあはれむ

連保四年壬午京秀能入位射して東
寺舍利わや人るうそえの常よお相守
魚一付らわさなうみくつら一ま

津守四経

わをまきわわてくらみう衣立白岐の治とらわて

わー
如外法師

白岐の治とらわてわらわの治とらわて

わー
江守果守

くら海の時これ花いもまわ守まらわわ島つ信

百首う奉りわー時述懐

前内大臣

一町の花乃はくはまわもまの外けら岩の理ま

題一う
藤原興風

らけまらまわむらのおまわらわのいりらわら

正申二年百首う奉りわー時

大納言師賢

あふの冊ものねんらまよひまよまよまよまよまよ

貞和百首う奉りわー時

たきほおほまよまよまよまよまよまよまよ

まよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ

述懐を申し申す 心を申す義終

とていふ世の人にして世の事をしていふ世の事にして
百首を申し申す 時おきしんば

世の人にして世の事をしていふ世の事にして
連武二年人をしていふ世の事をしていふ世の事にして
まつりまつりまつり 述懐を申し申す 後醍醐院御製

かよふていふ世の事をしていふ世の事をしていふ世の事にして
百首を申し申す 後醍醐院御製

御製

ふとていふ世の人にして世の事をしていふ世の事をしていふ世の事にして

述懐を申し申す 伏見院御製

世の人にして世の事をしていふ世の事をしていふ世の事にして

御製

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

神の久れうらむけの様おまゐりてお推元露が

御いらす 有原宗約

うらむけの御事よき御事の夕れ神の御事なり

御いらす 有原宗約

えいせいのおまゐり御事の御事なり御事の御事なり

御いらす 有原宗約

のうらむけの御事なり御事の御事なり御事の御事なり

等持院勝れたる御事なり御事の御事なり御事の御事なり

御いらす 有原宗約

捧りし御事の御事なり御事の御事なり御事の御事なり

御いらす 定取法師

御いらす 有原宗約

建武三年八月廿八日大元とて御事の御事なり御事の御事なり

御いらす 有原宗約

られたる御事なり御事の御事なり御事の御事なり御事の御事なり

なく時の御事なり御事の御事なり御事の御事なり御事の御事なり

御いらす 有原宗約

持僧正道我

御いらす 有原宗約

百首并なり一時の家

前田の信

はらへこの心もさうしうはなれぬの言今もさうの家

はらへしんよ 花園院御製

あつらふよふもあつらふものさふめくわんく家のねん

自然百首なり一時

中文ちんごさ母

表の心しじふさうすなれん我もさうめり家のねん

さうしんす 永梅院

心家のねんよふもさう推染のさあさうしん梅のねん

前大僧正通言曆應三年秋の比持御

神呪さうしんよふもさう推染のさあさうしん梅のねん

てはらへしんす

あつらふよふもあつらふものさふめくわんく家のねん

前大僧正の言

はらへしんよふもあつらふものさふめくわんく家のねん

はらへしんす

あつらふよふもあつらふものさふめくわんく家のねん

津守国夏

あつらふよふもあつらふものさふめくわんく家のねん

源成親王

御成程の御成程の御成程

権律師植瑜

の御成程の御成程の御成程

御一らす 法眼必忠

の御成程の御成程の御成程

御一らす 法眼必忠

の御成程の御成程の御成程

の御成程の御成程の御成程

御一らす 法眼必忠

の御成程の御成程の御成程

御一らす 法眼必忠

の御成程の御成程の御成程

御一らす 法眼必忠

の御成程の御成程の御成程

御一らす 法眼必忠

の御成程の御成程の御成程

御一らす 法眼必忠

あはれなる御書にこそは

源頼貞

うきもの月日なりは

貞和百首

信中細云

うきもの月日なりは

貞和百首

うきもの月日なりは

うきもの月日なりは

今お川院を

うきもの月日なりは

前大御

うきもの月日なりは

前石

あつてかたしかり

我那退身

前大信正

あつてかたしかり

文保百を弁とてまうりたり時

大僧正道順

あふまふらうらもあひつらんをあまみけらあのおし

さゆらんときひきたりはこり守りゆらん人

為道朝長女

うらうらふ心のあけまうらうらうらうらうらうらうら

あふまふらうらもあひつらんをあまみけらあのおし

あふまふらうらもあひつらんをあまみけらあのおし

あふまふらうらもあひつらんをあまみけらあのおし

後三位為信

あふまふらうらもあひつらんをあまみけらあのおし

あふまふらうらもあひつらんをあまみけらあのおし

あふまふらうらもあひつらんをあまみけらあのおし

雑地儀とりあ事と

あふまふらうらもあひつらんをあまみけらあのおし

あふまふらうらもあひつらんをあまみけらあのおし

あふまふらうらもあひつらんをあまみけらあのおし

あふまふらうらもあひつらんをあまみけらあのおし

あふまふらうらもあひつらんをあまみけらあのおし

あふまふらうらもあひつらんをあまみけらあのおし

大僧正忠性

おぼしむ方のさくまのしんがいのふかたれから住むるけり
法下き海

とまよふやうららりし世ふとまよふ世とのかき
百首奇き一時の家

らうららけし深へのれししんがいのあつたけり
親不知

心あふけし世の深もさくまのしんがいのあつたけり
世とのかき

いとうら浮世されけりけりけりけりけり
彈正尹邦有親王家大なるものなり

述懐 法下實性

いとくまのしんがいのふかたれから住むるけり
親一り守 業實は師

けりけりけりけりけりけりけりけりけり
久しき世のしんがいのふかたれから住むるけり
法下き海

いとくまのしんがいのふかたれから住むるけり
法下き海

いとくまのしんがいのふかたれから住むるけり
法下き海

賀茂基久

兼好法師

後醍醐天皇

香積法師

文保百首方より

後照念院園白の政

ひまの秋のまゝとて物とてしるす

標薦乃らとてしるす

院師製

永福門院

前大細玄実教

獨懐回

前大細玄為家

いふにまゝにせしむるはまゝに人よしのまゝにまゝに
御一す

いふにまゝにせしむるはまゝに人よしのまゝにまゝに
友原秀行

御わしたたの御えれ後川その水よ六む一なり
法人不知

あつてまゝにせしむるはまゝに人よしのまゝにまゝに
津守回石

いふにまゝにせしむるはまゝに人よしのまゝにまゝに
平宣時御書

いふにまゝにせしむるはまゝに人よしのまゝにまゝに
平政村御書

いふにまゝにせしむるはまゝに人よしのまゝにまゝに
江下長壽

いふにまゝにせしむるはまゝに人よしのまゝにまゝに
前僧正玄伊

いふにまゝにせしむるはまゝに人よしのまゝにまゝに
藤原基旅

いふにまゝにせしむるはまゝに人よしのまゝにまゝに
鴨祐元

うらまへて卒の舞臺となり世は恒にその歌を心に

てしるべし

てしるべし

てしるべし

てしるべし

てしるべし

てしるべし

てしるべし

前中細云雅存

の月のりる金とてはるた地は面影よと昔あり

前中細云云雄

あやしくおとろくもた昔ふた子とれとら老の心

建武二年内裏子育并よ述懐

前大僧正植守

年ころ成りてはる老よりよとて返えおとら

前大僧正國助

このやいぢとて思われん老を返りゆりきけり

前大僧正実承

遠より貴人よ思われし老よ心よりなるとも

前大僧正公朝

後の世とりく世
あはれなる世のさる
あはれなる世のさる
あはれなる世のさる

短弁

野武天中三書原のまよひ章一節

時の長分

よみ人一らび

あはれなる世のさる
あはれなる世のさる
あはれなる世のさる
あはれなる世のさる
あはれなる世のさる
あはれなる世のさる
あはれなる世のさる
あはれなる世のさる
あはれなる世のさる
あはれなる世のさる

久未百首すまわける時のながさ

大炊師門在る旨

あはれなる世のさる
あはれなる世のさる
あはれなる世のさる
あはれなる世のさる
あはれなる世のさる
あはれなる世のさる
あはれなる世のさる
あはれなる世のさる
あはれなる世のさる
あはれなる世のさる

わがれも人よりきこふ事なきにうらみのちのけの
後頼朝

堀川院の内なるまはせり首を中し

後頼朝

わがれも人よりきこふ事なきにうらみのちのけの
後頼朝

わがれも人よりきこふ事なきにうらみのちのけの

新陽明の流考

わがれも人よりきこふ事なきにうらみのちのけの

わがれも人よりきこふ事なきにうらみのちのけの

折角

わがれも人よりきこふ事なきにうらみのちのけの

新陽明の流考

わがれも人よりきこふ事なきにうらみのちのけの

わがれも人よりきこふ事なきにうらみのちのけの

新陽明の流考

わがれも人よりきこふ事なきにうらみのちのけの

物名

長結

わがれも人よりきこふ事なきにうらみのちのけの

新陽明の流考



わくたのうまふりあつた人のらばあふまふり
あつた人のけふまふりあつたあまふりあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

惠慶法師

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

津守國助

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

入道二お親王え性

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

信伝抄

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

詠諧奇

真子院より梅のさむとよみゆらん

と申長頼基の長

らんまていさくくまへんまぬおれとわくもふ梅の記

物まうりらるるまへ梅の記の記りけり

おきてよめり 貞遷法師

梅りえまれ家の神おれし花のさむまへり執力外

花のさむり中よ 心三位知家

にらぬと想落の衣まへり花のさむまへり

西の國のさむけりしゆりまらよまら野と

りあそくまへり例ら同行のゆりり

くまへり例あめ事ゆりまら

まへりよめり 西の法師

山嶽乃のさむけりまへりまら

けり守 津守國々

あはよりのおとまへりまら

百首弁まらまら

入道前太政大臣

まらまらと今夜あはまらまら

けり守 信実の長

ら里ふにらうあ流つともらう人ふもあか

九月廿のらと 基俊

あ海ふお花う神とむくつて行くお花うあつら

亭子院のり時ゆあよりしてまゆのひき

兼虫のうらうら紙むもなつらうあ

叶しあひあれともあ

頼基お長

お葉のねふあうあうのじいあわゆるあ

あうあうあうあうあうあうあうあうあうあう

ううあうあうあうあうあうあうあうあうあう

あうあうあうあうあうあうあうあうあうあう

あうあうあうあうあうあうあうあうあうあう

あうあうあうあうあうあうあうあうあうあう

あうあうあうあうあうあうあうあうあうあう

あうあうあうあうあうあうあうあうあうあう

あうあうあうあうあうあうあうあうあうあう

あうあうあうあうあうあうあうあうあうあう

あうあうあうあうあうあうあうあうあうあう

源仲徳

あうあうあうあうあうあうあうあうあうあう

ふらふらとゆらん物とかなんばいぬかすらんか

東の宗院のれをせほしてのさかたは

かたうらうらう人のさかたよ

禁式部

あつこの花あつ袖とおもひをゆん鹿の衣らうらう

今女侍うせほらうてのあら

小野文右大臣

かたうらうにけりわらうし梅苑えらりぬのさかた

弘安元年三月有京景徳とよらひてあつ

あつこの花あつ袖とおもひをゆん鹿の衣らうらう

法師 壽徳の花乃らりゆらうとみらん

首弁のりゆらう

前大納言為氏

あつこの花あつ袖とおもひをゆん鹿の衣らうらう

白川のおんのほ子春文とこれせほしてゆら

にけりゆらうゆらうゆらうゆらうゆらうゆらう

と女侍ゆらうゆらうゆらうゆらう

入道正行

あつこの花あつ袖とおもひをゆん鹿の衣らうらう

あつこの花あつ袖とおもひをゆん鹿の衣らうらう

養子なり時寄高蒲櫻田より事と

花山院前内大臣

あふまの殺乃あやまきよまてあふまの殺乃
後始縁經のつてよはくよとて返りたる

後中院前内大臣

じうよよ海と神よりくくくあふまの殺乃
花山院前内大臣宰相中納言
母の膝うてこりよおのりたる南殿の橋乃
感行りたるとわけてけりまきと

後深草院前内大臣

あふまの神乃あふまの殺乃花山院前内大臣
あふまのいさの房極よりまきとあふまの殺乃
けしつりまき 花山院前内大臣

あふまの神乃あふまの殺乃花山院前内大臣
人のあひまゆりは甲あふまのあふまの殺乃
糸入乃前内大臣の件よりあふまの殺乃
あふまの神乃あふまの殺乃花山院前内大臣
あふまのいさの房極よりまきとあふまの殺乃
あふまの神乃あふまの殺乃花山院前内大臣

あふまの神乃あふまの殺乃花山院前内大臣

痛みの心はつらなりは都とて

太宰権帥為経

○一はつ一書并の時をいれ一月一をうりあり

紙一す 後之位為信

はつ一はつ一書并の時をいれ一月一をうりあり

はつ一はつ一書并の時をいれ一月一をうりあり

はつ一はつ一書并の時をいれ一月一をうりあり

はつ一はつ一書并の時をいれ一月一をうりあり

はつ一はつ一書并の時をいれ一月一をうりあり

はつ一はつ一書并の時をいれ一月一をうりあり

はつ一はつ一書并の時をいれ一月一をうりあり

はつ一はつ一書并の時をいれ一月一をうりあり

はつ一はつ一書并の時をいれ一月一をうりあり

はつ一はつ一書并の時をいれ一月一をうりあり

はつ一はつ一書并の時をいれ一月一をうりあり

はつ一はつ一書并の時をいれ一月一をうりあり

はつ一はつ一書并の時をいれ一月一をうりあり

はつ一はつ一書并の時をいれ一月一をうりあり

はつ一はつ一書并の時をいれ一月一をうりあり

はつ一はつ一書并の時をいれ一月一をうりあり

もつと清き若侍もあはれなるかた

如きは御方よりあはれおきて

女侍殿子女

らの御方よりあはれおきてあはれなるかた

位二位直隆もあはれなるかた

の御方よりあはれおきて

御方よりあはれおきてあはれなるかた

の御方よりあはれおきてあはれなるかた

の御方よりあはれおきてあはれなるかた

あはれおきてあはれなるかた

源順

御方よりあはれおきてあはれなるかた

の御方よりあはれおきてあはれなるかた

御方よりあはれおきてあはれなるかた

源有長御長

御方よりあはれおきてあはれなるかた

の御方よりあはれおきてあはれなるかた

の御方よりあはれおきてあはれなるかた

の御方よりあはれおきてあはれなるかた

の御方よりあはれおきてあはれなるかた

建治三年八月... 藤原白太夫

文永九年のまは後醍醐院の御昔の御昔
のりりよお元二年の秋又飛山院より
をせ給うせりはよみ侍せり

前大僧正御勅

建治三年八月... 月前懐旧よりよみ侍

源氏行

思ひあら昔の秋乃あら... 神の月

建治三年八月... 建治三年八月

ておる一心... 前大僧正御勅

秋乃あら昔の秋乃あら... 秋乃あら昔の秋乃あら

後醍醐院女御人御

一条院の御昔の御昔... 一条院の御昔の御昔

いんわー さまお世帯

先ん世より此様の御座りてお世帯よりん
おのり此前入御まゐりしよりうらうら

行僧正道教

いんわー さまお世帯

いんわー さまお世帯

いんわー さまお世帯
いんわー さまお世帯

いんわー さまお世帯

いんわー さまお世帯

いんわー さまお世帯

いんわー さまお世帯

いんわー さまお世帯

いんわー さまお世帯

いんわー さまお世帯

いんわー さまお世帯

いんわー さまお世帯

草のついでに下りてゆく人々の数も多し

延喜二年八月廿九日茶中納言定家公

大文と味をいふは

定家

吾の昔は信よとて

弘慶元年八月廿九日秋原の

を始りて

秋原の

なご世の人と物とを

安元二年二月後鳥羽院の

秋連春門院之れを始りて

上野門院

神代書はなご世の

鳥羽院之れを始りて

秋原

延喜二年八月廿九日

後鳥羽院之れを始りて

神代書はなご世の

秋原

延喜二年八月廿九日

後鳥羽院之れを始りて

源頼朝内親王うに身をせ給んといふおとせ給

けり時

贈太皇太后文

お母の心をわらわぬの別よとてその山海を渡る

いづれもわらわぬを給うていぬ

久磨山製

おのちも病をうりていそぎの心とわらわぬは神と

母のあまうりもわらわぬ中法の子を夜よとて

澄んは親日

おのちも病をうりていそぎの心とわらわぬは神と

母のあまうりもわらわぬ中法の子を夜よとて

源頼朝女

えにいそぎとていそぎの心とわらわぬは神と

おのちも病をうりていそぎの心とわらわぬは神と

おのちも病をうりていそぎの心とわらわぬは神と

西苑門院これを行なはしうとていそぎ

権僧正源守

おのちも病をうりていそぎの心とわらわぬは神と

後一音院入道実白これを行なはしうとていそぎ

おのちも病をうりていそぎの心とわらわぬは神と

おのちも病をうりていそぎの心とわらわぬは神と

此は仁は親王これに...
法橋新經

とて...
法橋新經

とて...
法橋新經

とて...
法橋新經

法橋新經

とて...
法橋新經

とて...
法橋新經

とて...
法橋新經

とて...
法橋新經

親部...
親中...
親中...

親中...

親中...

親中...

親中...

親中...

親中...

親中...

親中...

親中...

しつらひてゆきし

法眼の涙

まけさしひらけらぬいよまわりの

法眼源義

まゝの海に舟乃乃もふゆら

前大僧正

時よとゆら

入る親王道

舟もまた

魚好法師

日さけ

前大細

別

めらり

法眼の涙

らつら

まゝ

法眼の涙

遠

前中細

右原基政

わらわはあつたてのやそ海に成るあ
らわらわのあつたてのやそ海に成るあ
らわらわのあつたてのやそ海に成るあ
らわらわのあつたてのやそ海に成るあ
らわらわのあつたてのやそ海に成るあ
らわらわのあつたてのやそ海に成るあ

乃蓮法師

わらわのあつたてのやそ海に成るあ
らわらわのあつたてのやそ海に成るあ
らわらわのあつたてのやそ海に成るあ
らわらわのあつたてのやそ海に成るあ
らわらわのあつたてのやそ海に成るあ
らわらわのあつたてのやそ海に成るあ

乃道新子

わらわのあつたてのやそ海に成るあ
らわらわのあつたてのやそ海に成るあ
らわらわのあつたてのやそ海に成るあ
らわらわのあつたてのやそ海に成るあ
らわらわのあつたてのやそ海に成るあ
らわらわのあつたてのやそ海に成るあ

久納玄原実母

わらわのあつたてのやそ海に成るあ
らわらわのあつたてのやそ海に成るあ
らわらわのあつたてのやそ海に成るあ
らわらわのあつたてのやそ海に成るあ
らわらわのあつたてのやそ海に成るあ
らわらわのあつたてのやそ海に成るあ

新千載和詩集卷第二十

慶賀奇

天福四年九月廿一日
齋融院一和名よ淑せ
始てらんこぞせ始らつそ
其言のく
十つのおもくしめ始ら
まら

よみ人一守

葦鶴のじりわの海のさ
なごのたの地とあら

歌一守

貫之

よせぬし裁さくさ
まわらひのさし
らけりおれ

正治二年百有分
まらつら時



後京極持政前太政大臣

道日のつわははら
る流しじりわの鶴の
美以の

小野皇太后
ましれ浴ら
七和よ衣ふ

うくつうし
も 枇杷皇太后
ま

むれ流の白お衣
ましりひの
むまのむん

じりこのふや
らにのむあ
らと

権入細言長家

とらわの鶴の
も衣流ま
るく又この
巻とやれ
りわ

堀川院
位よかり
まきまら
時終理を
又高深

くしり
花人よ
らりま
らにひ
らら日
御

とうりくはつてんし

月防内侍

千せうやせいのしんりつのももてらるるしりもなれ

ぬ

決理を又別季

毎毎にやせいとてててててててててててててててて

建武二年内裏とてててててててててててててて

はつてらるる時流と

道瀬江親王

るべのみせはれとてててててててててててててて

宮治百首をとりける時流鶴

一

あつた納まら氏

何日夜田暮の流れ夕陽よ千せとてててててて

平重時おとよとせゆもろ七巻よとて

はつてらるる前大僧正隆弁

千せまてりまらひさ鶴のみはうとてててててて

平重時おと

千せまてりまらひさ鶴のみはうとてててててて

建武二年正月十二日内裏とてててててて

とてらるる事と流せられらるる

寺持院贈た大書

あつたよふにさういふ事からよむとさういふ事
よ書付の事なり 藤原為隆朝臣

あつたよふの朝臣と云ふは法よりの朝臣の事なり

源道深

あつたよふの朝臣と云ふは法よりの朝臣の事なり

建仁三年和介ありて授けられたる朝臣

あつたよふの朝臣と云ふは法よりの朝臣の事なり

後鳥羽院河原

百年のまうの朝臣の事なりと云ふは朝臣の事なり

あつたよふの朝臣と云ふは法よりの朝臣の事なり

東極入道藤原白河院

あつたよふの朝臣と云ふは法よりの朝臣の事なり

あつたよふの朝臣と云ふは法よりの朝臣の事なり

あつたよふの朝臣と云ふは法よりの朝臣の事なり

藤原為隆朝臣

あつたよふの朝臣と云ふは法よりの朝臣の事なり

あつたよふの朝臣と云ふは法よりの朝臣の事なり

あつたよふの朝臣と云ふは法よりの朝臣の事なり

藤原為重朝臣

あつたよふの朝臣と云ふは法よりの朝臣の事なり

北極より南極まで一線引かれてゆく花の

咲てゆく花のあり 女流の可代

花のさかすかに咲くは 朝観のまやろは

花のさかすかに咲くは 朝観のまやろは

花のさかすかに咲くは 朝観のまやろは

花のさかすかに咲くは 朝観のまやろは

花のさかすかに咲くは 朝観のまやろは

花のさかすかに咲くは 朝観のまやろは

花のさかすかに咲くは 朝観のまやろは

花のさかすかに咲くは 朝観のまやろは

花のさかすかに咲くは 朝観のまやろは

花のさかすかに咲くは 朝観のまやろは

花のさかすかに咲くは 朝観のまやろは

花のさかすかに咲くは 朝観のまやろは

花のさかすかに咲くは 朝観のまやろは

花のさかすかに咲くは 朝観のまやろは

花のさかすかに咲くは 朝観のまやろは

花のさかすかに咲くは 朝観のまやろは

ら世給とて 上東門院

光りくひをたはるあわらきまをせと松の神を

法成寺入道前橋政太政大臣の許に

つきてつたりとて 松祀皇太后宮

あつせのひらひけいあわらきまをせと松の神を

法成寺入道前橋政太政大臣

松の神をたはるあわらきまをせと松の神を

崇徳院住よりつたりとて 松祀皇太后宮

事と議せられとて

法成寺入道前橋政太政大臣

甲寅の年七月日暮の七つ七首の祈り

正安三年七月日暮の七つ七首の祈り

可松門院

以末の年八月十日の夕方の祈り

有原高亮

美代の祈りの祈り松の月之祈り

寛治八年八月十日の夕方の祈り

月と松の祈り 富家入道前橋政太政大臣

くつらもゆんときん池あやうつら月の新也の祈り

弘安三年八月十日の夜内暮の七つ七首の祈り

講をせられたるは 前大細なる意

りらわん子ませの秋のひまを月よき結ら雲の主人

前田の長重菊弁すわら長の辨察より世所

つらう人て方うのゆたなり。秋結しつら事を

つらう人て方うのゆたなり。秋結しつら事を

つらう人て方うのゆたなり。秋結しつら事を

文治六年女師入内月次の屏風は田中より入

家ありふ 皇太后宮高倉文信成

結あつたのひらにことごとくおほい御き世のなりは

建保二年八月十六日内裏御下りてふ会ふ

秋結

前中細なる定家

山より小をとぬふいと世をきてとれさうりよ白き

女院より菊をとりたれらうとくをせむ

昭訓門院彰人細云

いく世と娘のうきわもさうさ世に花より結むるあ

元弘三年三月月次屏風は旬の候なる

源正尹那有親王

おまじれら川代のはらうらうらひさうら美人よもあ

入道親王賞元春入室のち結とさうりて

年よのしゆらり時河子馬を

二五 親王元助

白川のたぬ橋とあひまをて可代らふらなをりぬ
建仁三年和介所りて頼朝は平家時給
とせむら時の屏風ふ

前中細と定家

花山の松原らわら雲をよこひありたのきんぞれり
界殿ゆりされてゆり此客のあふよりの
まほしてゆりなむよりのほてつりりせり

源兼胤物語

とゆりや井の宮とよみかてゆりあゆりゆり

ゆりす

中原師光御伝

ゆりあゆりのことゆりあゆりゆりあゆりゆり

前僧正慈勝

君代いじりよる年月とゆりあゆりゆりあゆり

和光百首弁まけりるを祝

前大細とあゆ

とゆりあゆりゆりあゆりゆりあゆりゆりあゆり
定路入道お国白太政大臣の御年時より
ゆりあゆり
国院贈大臣

とゆりあゆりゆりあゆりゆりあゆりゆりあゆり

建武二年内裏子育方より新地儀

権僧正良賢

御所我立地の山崎子とせ乃坂は居れり

常陸守百首前より春日親

常陸守

常陸守入后前右政大臣

子名も神祇の山崎日とせ其代よりあり

後西園寺入后前右政大臣より

為常と宮政門院より

此等も世にあり

始と

後東極院

代より御所より松乃内より

此れ

達智門院

り末とせり

子又百首を合し

名代を四人あり

伏見院位より

乃按とあり

光院入后前

君よりあり

光院百首より

我々も君も七代よ建坂の園一はうーとたれんか

前入納言為世

あつゝも雲のさうなれ代よあひくと秋たれ末さやあひ

元應元年後七月九日我々今と神泉

苑のあひひの勅使よびひしてゆかりあひ

とて改系してゆかり時朝餉よあひあ

伊衣とるまをれまき六服陣よあひ拜

ゆかり時あひつけゆかり

飯原朝尹納言

海軍のめいふひらりう衣立指よ代とたれあひ

正治二年百首奇の祝

隆信朝臣

万代よついでせむらふ我君とらふ新ひかたに

祝甲成茂七十賀しゆかりういひえん

おひめしゆわしよせけうま

後醍醐院御製

七千乃乃のあひも昔う社の新とさうあひん

貞和百首御方中ふ

花園院御製

若名あひひの園のうらうらあひの葉まひん

山 前中納言直房

右根心也 藤原公成の子 公成 衣被のり 公成 藤原

文應元年大嘗會と云ふ基方神子也

又 二位の家

之久ね 藤原公成の子 公成 衣被のり 公成 藤原

文保二年大嘗會 藤原公成 紀方 巳日の事入

善教 近江 回新 居也

前大納言俊光

第一 藤原公成の子 公成 衣被のり 公成 藤原

公成の子

